

平成28年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 三郎丸 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

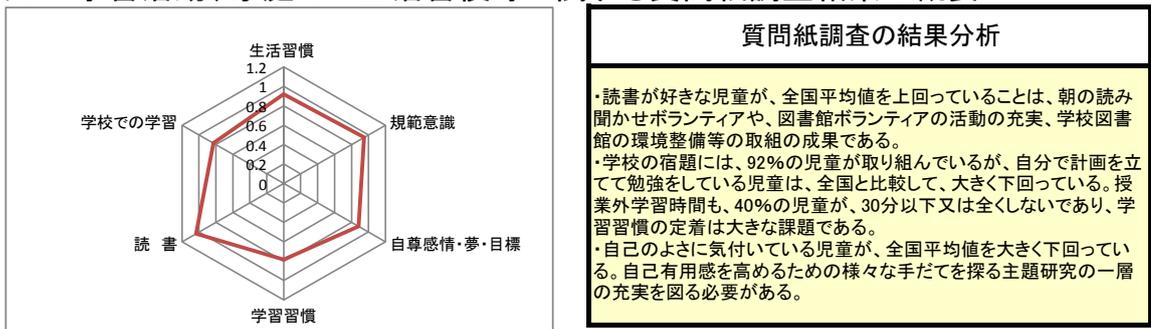
(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.4	70	5.6	56	12.1	76	5.8	45
全国	10.9	73	5.8	58	12.4	78	6.1	47

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域において、全国平均正答率を下回っているが、全体的に無解答率は低い。 ・特に「書くこと」の領域における正答率が低く、日頃から書くことを習慣化する必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく読んだり書いたりする問題は、無回答率が低く、6問中4問は、全国平均正答率を上回っている。	
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じて、書く事柄を整理することが苦手であり、努力を要する。 ・ローマ字の読みを書いたり読んだりする問題の無回答率が高く、正答率も非常に低い。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域において、全国平均正答率を下回っている。 ・「国語への関心・意欲・態度」に関する問題の正答率が低いことが、大きな課題である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・グラフを基に、分かったことを的確に書くことを問う選択式の問題は、ほぼ全国平均正答率と同程度である。	
	努力が必要な問題	・質問の意図を捉えたり、話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問したりといった「話す・聞く能力」に課題がある。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域において、全国平均正答率を下回っているが、全体的に無解答率は低い。特に、「数と計算」領域の無回答率は、全国平均率と比較してわずかに下回っている又は同程度である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・繰り下がりのある減法の計算問題は、無回答率が低く、全国平均正答率を上回っている。	
	努力が必要な問題	・「量と測定」の領域における正答率が低い。特に、三角形の底辺と高さの関係等、図形の面積を求めるために必要な長さを理解できるようにすることが課題である。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・すべての領域において、全国平均正答率を下回っているが、全体的に無解答率は低い。 ・特に「数量関係」の領域における正答率が低く、大きな課題である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	・示された式の中の数値の意味を、他の数値や演算と関連付けて解釈し、それを言葉や数を用いて記述する問題は、全国平均正答率と同程度であり、無回答率は、全国平均率を下回っている。	
	努力が必要な問題	・資料から必要な情報を収集し、目的に応じて表やグラフを用いて表したり、適切な判断をしたりする問題は、正答率が低い。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語科・算数科の基礎的・基本的な内容の定着を図ることができるように、5校時開始前の10分間「チャレンジタイム」を継続し、全校で一斉に取り組む。国語科では、ローマ字の読みを書いたり読んだりする問題、算数科では、「量と測定」領域の基礎的・基本的な問題を準備し、定着を図る機会を意図的に多く仕組むようにする。 ○ 国語科の「書く能力」を高めることができるように、順序を整理し、簡単な構成を考えて書く(低学年)、相手や目的に応じ、調べたことが伝わるように書く(中学年)、目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて書く(高学年)など、発達段階に応じた目指す能力や具体的方策についての校内研修(学力向上研修)を行い、実践に生かす。 ○ 算数科の「量と測定」の領域や、「数量関係」の領域にかかわる技能や数学的な考え方を養うことができるように、指導方法工夫改善教員及び教務主任が、原則として担任と少人数指導を実施し、習熟度に応じた指導を行う。 ○ 「北九州スタンダード すべての教師のための授業改善ハンドブック」リーフレット版を全職員が手元におき、「わかる授業」づくり5つのポイントを踏まえた授業実践を行うとともに、「授業改善点検評価シート」による自己評価活動の徹底を図り、授業改善に取り組む。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ○ 楽しんで読書(低学年)をしたり、幅広く読書(中学年)をしたり、考えを広げ、深めたりする(高学年)態度形成を図ることができるように、読み聞かせボランティア「ムーン会」との連携を継続・強化し、毎月の読み聞かせの更なる充実を図る。 ○ 家庭における望ましい基本的生活習慣や学習習慣の定着を目的とする「振り返りカード」を作成し、定期的な活用を図る。また、「振り返りカード」への保護者参加や学校・学年通信等による情報発信により、学校と家庭(保護者)との協働体制強化を目指す。 ○ 学年の発達段階を考慮しながら、児童の実態に合った家庭学習における自主学習への取り組みを推進する。校内放送や校内掲示などで、取り組み方のよい児童を紹介することにより、意欲の向上と継続を図る。
